

【選評】

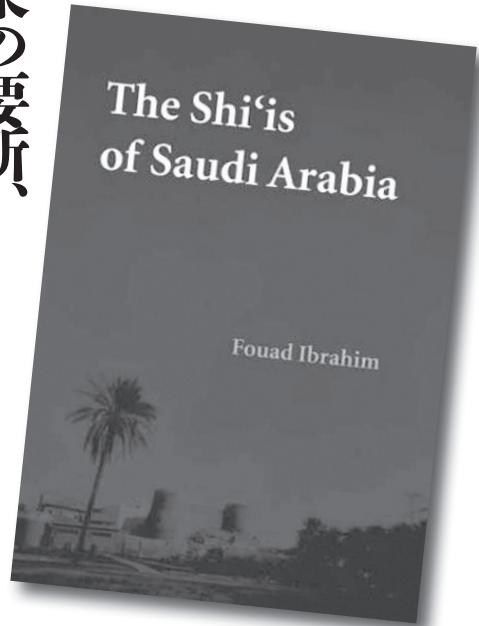
東京大学准教授

池内恵

中東の要所、 サウジアラビアにおける シーア派反体制運動

アラブ諸国の変動の波はサウジアラビアに及ぶのだろうか。これは現在の中東をめぐる最重要の分析課題の一つである。

サウジアラビアの内政上の弱点



The Shi'is of Saudi Arabia, Fouad Ibrahim

London, Saqi, 2006

は、現体制の枠組みの中では十分に国民統合の枠に収められない社会集団・地域を複数抱えているところにある。イスラーム教の二大聖都メッカとメディナ、商港ジェッダを擁す

るヒジャーズ地方はその一つであるが、それ以上に、世界有数の油田地帯である東部州に多く住むシーア派が、十分に国家と社会に統合されていない点に不安がある。

当事者ゆえの厚みのある記述

シーア派はサウジアラビアの人口の一〇～一五％程度を占めると一般に言われており、ペルシア湾岸に面した東部州では、外国人を除く人口のうち三七％を占めるという推計がある。特にカティーフでは人口の八七％、ハサでも四〇％を超えると思われる (Robert Lacey, *Inside the Kingdom: Kings, Clerics, Modernists, Terrorists, and the Struggle for Saudi Arabia*, New York, Viking, p.101)。

今回は、シーア派の社会集団としての成長、帰属意識の行方や、政

治的結集の進展を知るためにファード・イブラーヒーム著『サウジアラビアのシール派』を取り上げておく。二〇〇四年にロンドン大学に提出した博士論文に基づく、サウジアラビアのシール派の政治運動についての代表的な基礎文献である。著者自身が、本書で主要な検討の対象となる「イスラヒーヤ（改革）運動」に参加して出国し、ロンドンを拠点に活動している当事者であることから、豊富な内部資料・一次資料に基づいている。

運動の「当事者」である著者が、中立的・客観的に記述を行い得ているか疑問を抱く向きもあるかもしれない。確かにすべてを鵜呑みにすることは禁物である。しかし英国の大学のデイシプリンの枠を通し、学術出版の制度を通じて刊行されることで、かなり高い水準の客観性が確保されている。

サウジアラビアのシール派の存在が

見えにくいのは、それが複数の意味で「周辺」に位置していることに由来している。教学上は、シール派の拠点は何よりもイラクのカルバラーやナジャフであり、イランのコムであって、サウジ国内には教学上の求心力を持つ拠点が乏しい。政治的にも、シール派が多数を占めるイラクやイランと対照的に、人口の一割程度を占めるにすぎないサウジアラビアでの政治的な存在感は当然限定される。

著者は「改革運動」の発端と展開を振り返り、段階を追って記述を行うことで、「サウジアラビアのシール派」としての固有の政治的アイデンティティの形成を描いている。もちろん「改革運動」がサウジアラビアのすべてのシール派教徒を代表するものではないだろう。しかし最も先鋭的に、シール派の政治的自覚の形成と変化を先導してきたと見ることができよう。

「リベラルな改革派」への道程

著者によれば「改革運動」の発端はイラクのカルバラーにある。シール派の宗教学者（ウラマー）の最高位階であるマルジャヤ・タクリードに達したムハンマド・マフディー・シラーズイー（Muhammad Mahdi al-Shirazi 1928-2002）が精神的指導者となり、有力な宗教学者のムハンマド・タキユ・ムダッリスイー（Muhammad Taqi al-Mudarresi）を实际的な指導者として一九六八年に設立された宣教者前衛運動（Haraka al-Risaliyin al-Talafi: Movement of the Vanguards of Missionaries: MVM）が、政治的な意思表明を極力避けようとする静謐主義を採用してきたナジャフの保守的な教学機構と一線を画し、イスラーム教に基づく政治の実践を求めた。

ここにサウジアラビア東部州出身の宗教指導者ハサン・サッファール(Hasan al-Safar)や、タウフイク・サイフ(Tawfiq al-Saif)が参加し、やがてカテーフを拠点にサウジアラビアのシーア派の宗教・政治指導者として台頭してくる。

ここで興味深いのが、「アラブのシーア派」としてのネットワークである。学問的には、カルバラとナジャフを擁するイラクこそが世界のシーア派の中心地であり、発信力と求心力も強い。ここにまずはサウジアラビアのシーア派も集まってくる。ただしサダム・フセイン政権下でシーア派の宗教・政治運動に統制・弾圧が強まり、MVMはクウェートに移る。一九七〇年代にサウジアラビアのシーア派でMVMに参加した者の多くも、クウェートに送り込まれてこの運動の教育宣伝を受けている。

シーア派の近代の宗教・政治運動には、イランのホメイニが主導するヴェラーヤテ・ファギーフ体制を唱導してイスラーム法学者による直接統治を主張するタイプと、イスラーム法学者が政治的な発言を行うものの直接は統治権を要求しないタイプがあり、MVMに参加したサウジアラビアのシーア派も後者であって、イラン型の神権政治を目指していたわけではない、というのが著者の歴史記述の含意だろう。

しかしサウジアラビアのシーア派の政治運動は紆余曲折をたどる。一九七九年のイラン革命はサウジアラビアのシーア派の急進化をもたらし、同年二月の東部州の暴動(インティファード)が発生する。ここでサッファールは「イスラーム革命機構(Munazzama al-Thawra al-Islamiya Islamic Revolution Organization: I

RO)」を結成し、テヘランに拠点を移す。しかし八〇年代、イランが巡礼者を通じてサウジアラビア内政の攪乱を図ることで、サッファールらIROの指導者は、「イランの手先」となるか、「サウジアラビア国民」としての帰属意識を再確認するかの選択を迫られる。ここでサッファールらはサウジアラビア国民としての権利の主張に舵を切り、穏健路線に転じる。一九八八年のイラン・イラク戦争の終結によってイランとIROの関係はさらに細っていく。

この段階で、IROに集ったサウジアラビアのシーア派の政治勢力は故地のサウジアラビアにも、シーア派の拠点のイラクにも、政治的思惑から接近してきたイランにも、活動の空間を得られなくなったことになる。

しかしここでいったんシリアへ移動したIROは、一九九〇年代初頭



裁判なしに収監された住民の釈放を求めたシーア派デモ（2011年3月9日、カティーフ）（ロイター／アフロ）

にロンドンとワシントンに本拠を移し、一九九一年からは「改革運動」と名乗って、M V Mから自立し、人権や表現の自由を主に掲げるようになる。革命論やシーア派固有の観念の主張を極力控え、リベラル派やス

ンナ派のイスラーム主義者の一部との接近を試み、国民としての平等な権利を求めていくことで、欧米の支援を受け、新たに地歩を固め始めた。湾岸戦争やイラク戦争によってサウジアラビア王制が改革圧力を受けるたびに、恩赦が行われ、一部の活動家が帰国して国内に拠点を築いていた。

平等を軸とした連帯へ

サウジの政権とシーア派勢力との一進一退の攻防が今どの段階に達しているのか、公式メディアからはうかがい知れない。近年にインターネット上では活発にアラブのシーア派のメディアが台頭しており、ある日突然それらのメディアによって共通の政治意識を持った多数のシーア派市民が権利要求を行う事態もあり得ないことではない。

政治状況の変化に応じて思想も行動様式も変化させてきたサウジのシーア派の政治運動については、「結局はイランの別働隊ではないか」という憶測も完全に否定されることはないだろう。イラン側がサウジのシーア派を利用しようとする動きも常にある。しかし現在はイランの支援をサウジのシーア派の側が積極的に受け入れるとは考えにくい。シーア派としての固有の権利の主張よりも、サウジアラビア国民としての共通の市民権の主張のほうが、国際的な支持を受けやすく、国内の他の勢力との連携もしやすい。そして国家がサウダ家の私有財産ではなく、出自を問わず平等な権利を持った国民のものである、という思想が国民各層に浸透することこそが、サウジアラビアの現体制にとって最大の挑戦なのである。■